

カトリック 仙台教区報

2006年7月2日 No.170

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

豊かな聖霊の恵みを受けて

聖霊降臨の祭日に堅信式

仙台中央地区6教会24名が受堅

6月4日、聖霊降臨の祭日。

ちのもとに来てくださり、私たち

2年ぶりに堅信式が行われる

の内からその愛を燃え立たせて

ため、仙台中央地区の各教会から信徒が詰めかけ、元寺小路教会の大聖堂は約400人の信徒でいっぱいになった。

午前10時、平賀徹夫司教の主司式で、ミサが始まった。4人の中央地区の司祭たちとの共唱ミサである。受堅者24人は、代父母とともに、最前列に並んでいる。24人中、中高校生会関係者は18人である。

説教の中で、平賀司教は次のように述べた。

「今日は聖霊降臨祭で、全世界の教会にとつて、一番大きなお祝いです。私たちをキリスト者として導き続けてくださる聖霊

が注がれたことを記念するとともに、今も聖霊を注ぎ続けてくださっていることを祝う日です。神の愛である霊が親しく私



仲間となるのです。受ける人々に来てくださるので、神が私たちに何をしてくださったかを、世界に告げる

今日堅信の秘跡を受ける皆さんは、これまで準備を続けてこられました。

私たちは聖霊の力、聖霊の光を注いでいただいた者です。今、そのことを新たに思い起こしましょう。

『カトリック教会の教え』にはこのように書かれています。『堅信とは、神の子とされたキリスト者を聖霊降臨の恵みにあずからせ、洗礼によつて新たに生まれた者を勇氣あるキリストの使徒とする秘跡です』。堅信の秘跡によつて、聖霊の7つの賜物をいただきます。その7つとは、昔は『上智、聡明、賢慮、剛毅、知識、孝愛、敬畏』、

といわれていました。現在はやさしい言葉で、『知恵と理解、判断と勇氣、神を知る恵み、神を愛し、敬う恵み』。一つのことだけについてお話したいと思います。神の愛の霊を受けて、キリスト者として生きていく上で、注目したいのは、剛毅、勇氣です。神を表していく勇氣、神の愛の証人となる勇氣です。

例えば、乗り物などで、すぐに席をゆずることができませんか。ゆずれるのなら、神の愛がうながす

ので、すぐゆずれるのです。神の愛を表す勇氣です。社会的なことだけではなく、教会の交わりの中でも、神の愛を表す勇氣が必要で

堅信を受ける皆さん、神の子として成長するために、私たちを、いつも導き、支えてくださるために聖霊が降ってくださるのです。一つになって教会をつくっていきましょう。

説教の後、堅信の秘跡の授与になり、24人の受堅者が、代父母と共に祭壇の前に進み出た。司教の問いに、それぞれ、信仰を込め、神の子として生きる決意に燃え、「信じます」「約束します」と力強く心えた。

一人ひとりに、司教が按手し、「父の賜物である聖霊のしるしを受けなさい」と額に香油を塗った。その後、「主の平和」と司教が受堅者の肩をたたき、受堅者も「主の平和」としっかりと応答し、堅信の秘跡の授与の儀は終わり、ミサが続けられた。

共同祈願は、堅信式の祈願で、新受堅者を含んだ7人の代表によつて祈られた。

平賀司教による荘厳な派遣の祝福で聖霊降臨の祭日、堅信式のミサが終了した。

仙台教区司祭団の役割と担当

2006年5月29日発表

*教区本部

教区長 平賀徹夫

司教総代理 佐藤守也

教区事務局長 和野信彦

教区会計 和野信彦

*司教評議会

平賀徹夫 佐藤守也 和野信彦

彦 首藤正義 田中丈夫 氏家

和仁 渡辺彰宏 板垣勤 シヤ

ール・エメ・ボルテック マル

コ・アントニオ・デ・ラ・ローサ

パヴェレット・トマス

*教区司教司牧評議会

平賀徹夫 佐藤守也 和野信彦

小松史朗 土井勝吾 小野寺洋一

板垣勤

*青少年担当

木村国基 舟山尊

*教区司教司牧評議会

佐藤守也 会津隆司 氏家

和野信彦

*神学生養成

氏家 和仁 和野信彦 会津隆司

*人権を考える委員会

土井勝吾 和野信彦

*宗教学法人カトリック仙台司教区責任

役員会

平賀徹夫 佐藤守也 和野信彦

会津隆司 小野寺洋一 佐々木博

三浦正三

*教区司教司牧役員会

佐藤守也 平賀徹夫 和野信彦

会津隆司 木村国基 渡辺彰宏

*財政問題評議会

平賀徹夫 佐藤守也 和野信彦

*施設整備協力制度

佐藤守也 和野信彦

*教区広報

佐々木博 和野信彦

*センター管理運営委員会

佐藤守也 和野信彦 シヤールエ

メボルテック

*中央協議会関係その他

《典礼委員会》 首藤正義

《カトリックジャパン》 田中丈夫

《カトリック障がい者連盟》 土井勝吾

《難民移住移動者委員会》 佐藤

*学校法人東北カトリック学園

理事長 佐藤守也

常任理事 会津隆司

理事 渡辺彰宏 レウエイエ・アン

ドレ

評議員 梅津明生 佐藤修 小野寺

洋一 渡辺彰宏 会津隆司 佐藤守也

*社会福祉法人カトリック児童福祉会

理事長 三浦正三

理事 川井啓

評議員 鷹尾達衛

監事 渡辺彰宏

*財団法人 スペルマン病院

理事長 鷹尾達衛

理事 土井勝吾

*司教神学顧問 佐々木博

*司教外国語秘書 村貞スエファノ

は責任者



今年の平和旬間中の 「平和を求めるミサ」 司教 マルチノ 平賀 徹夫

1981年、ヨハネ・パウロ2世教皇が訪日された際、広島から全世界に向けて「平和メッセージ」を発表されました。これにこたえて日本のカトリック教会は1982年に、8月6日から15日までを「平和旬間」と定め、平和を求めて祈り、活動するなどしながら、特に平和を意識して過ごす10日間とする、としてきました。日本国内各地、特に広島教区や長崎教区では毎年、特別な企画を立て、その案内も届きますから、できる方は参加なさったらよいでしょう。

仙台教区では今年、次のようにすることにしました。平和旬間中の8月13日の主日に、原則として教区内の全小教区のミサで「平和を求めるミサ」をささげる、というものです。(平和旬間中の日曜日は2回ありますが、8月6日は「主の変容」の祝日ですので、その日は典礼暦の通りにします。)そのミサの式次第は「教区人権を考える委員会」で作成していただくことになっており、後日、各小教区に届けられます。ただ、今年はその日にできない(聖母被昇天のお祝いをする事になっている、など)という小教区もあるかと思いますが、そういうところでは別の日にでも、平和旬間の趣旨に沿い、平和を求める祈りをささげていただきたいと思います。

現今の日本および世界の様相を見ますと、ただの願望だけでなく、平和という恵みを求めて祈り活動することが本当に私たちの使命となっていると思わざるを得ません。



仙台教区司祭団 5月3日撮影

塩と光

日々聖霊に満たされて生きる事が、わたしたちキリスト者の生き方です。また、聖霊によつて一人ひとりが霊的に刷新されなければ、信仰共同体である教会の交わりと一致も実現しません ミサの第三奉献文で「御子キリストの御からだは御血によつてわたしたちが養われ、その聖霊に満たされて、キリストのうちにあつて、一つのからだ、一つの心となりますように」と祈る事によって、まさに教会が育てられてゆくのです。しかも、教会の交わりと一致の源は、父と子と聖霊の交わりと一致にほかなりません。もし、教会の中に分裂や対立が生じるとすれば、それは父と子と聖霊の交わりから浮き上がってしまう、人間的レベルでの力関係に振り回されているからです。「一人または三人がわたしの名によつて集まるところには、わたしもその中にある」(マタイ18・20)と言っておられるキリストから離れ、例えば自分が傷つけられた相手の顔しか見えなくなる時、ミサからも遠ざかる悪循環に陥ってしまいます(博)

雨に恵まれた「春の寿庵祭」 地元の農業関係者と共に

5月28日(日)、カトリック水沢教会主催の「春の後藤寿庵大祈願祭」が160余名の参加を得て行われた。

当日は、天気予報通り夜半から雨となり、朝になっても強まるばかりで、会場を寿庵廟近くの「胆沢平野土地改良区」2階ホールに変更した。

司式した遠野教会のエンデルレ神父は「いろいろな行事のとき

よく、今日は晴天に恵まれて…といいますが、雨もまた恵みです。生長する稲たちがほしがっているもの一つが雨ですから…」と挨拶し、ミサがはじまった。

奥州市水沢区長、地元町内会、農業実行組合の方々の挨拶のなかで、「厳しい農政事情の中ではありますが、農業に携わるものとしては、豊かな実りを祈らずにはおられません。」ということばが印象的だった。

ミサの後、胆沢平野土地改良区



写真提供：胆江日日新聞社

理事長の佐々木宏氏が講話し、1万ヘクタールに及ぶ広大な胆沢

平野の水田を潤すために、後藤寿庵や彼を支え、さらにその心を受けつぎ発展させてきた多くの先人たちの苦労、深刻な水不足に涙した農家の人々の心を「水を守る立場」から感銘深く話された。

来年は、五月晴れのもと、高らかに寿庵賛歌を歌いながら豊作祈願行列のできる「寿庵祭」であるようにと祈りながら、雨の寿庵祭を終えた。

(水沢教会・西川桂子)

あっちこっちミサ

「おうちにかえろう」

5月21日に「あっちこっちミサ」が元寺小路教会の小聖堂で行われました。「あっちこっちミサ」とは、全国のあっちこっちで同じ日、同じ時刻、同じ典礼でミサを捧げることに青年の輪を広げていくことを目的として企画されたものです。今回は、「おうちに帰ろう」のテーマのもとミサがささげられました。テーマの中には、いつてきますと同時にただいまの場所である私たちの家であるミサに帰りたいとの願いが込められています。

当日、天候にも恵まれて年齢国籍を越えた多くの参加者が集

り、共に静かな祈りのひと時をささげました。ミサを通して感じたことは多々あったのですが、中でもミサの初めと終わりに全体で「いつてきます」と「たたいま」の言葉を声に出したことがとても印象深いです。参加者一人ひとりが普段、何気なく口にするこの言葉の意味、私たちにとってミサとは何かということとをこのミサ



を通して考えることができませんでした。ミサ後、交流会も行われ大いに盛り上がりました。最後に司教さま、神父さまをはじめとする参加者全員で肩を組み、「あっちこっちミサ」のテーマソングを歌いました。ミサ全体を振り返ると、私たちには教会という帰れる場所があること、周囲の人、教会の温かさを改めて感じることで、

(渡辺 顕一郎)

典礼の霊性を深める

司教神学顧問 佐々木 博

「祈りの掟は、信仰の掟」

(Lex orandi lex credendi)

信仰理解を深めることは、同時に祈りを深めることになりま

す。5世紀前半の教皇グレゴリウス1世の言葉とされる、「祈りの掟は、信仰の掟」は、教会の典礼こそが信仰の基準にもなるという意味です。ですから、信仰教育と典礼教育は決して切り離すことはできません。

よく、一般信者の再教育を大切にしておりました。つまり、入信式は信者として新しい生活を始めるスタートなので、当然信仰教育が継続してなされる必要があります。また、既に信者として生活してきたキリスト者に対しては、まさに生涯教育として、信仰教育がなされるべきです。この信仰教育が、各共同体の中でしっかりと実施されなければ、遅かれ早かれ教会を離れてしま

う信者が増えてきます。

信仰教育は、同時に実践的な典礼教育が伴って初めて実を結びます。なぜなら、信仰理解を深めていくとき、当然祈りの体



人権を考える委員会から 外国籍信徒のサポートを考える

2006年5月13日(土)

教区センターで「外国籍信徒に
関わっている方々との懇談会」
を開催。ゲストは、福島松木町
教会の駒田瑞穂さん、元寺小路
教会の庄司マリンさん(フィ
リピン出身)、マギー・フォス
テルさん(ボリビア出身)、管
野利さん(奥様がブルー出身)、
仙台中央地区モデラトールの
エメ神父様。皆さんからそれぞ
れの経験をもとにした「ご意
見・ご提案を聞くことができました」。

教会に來ている外国籍信徒
は言語ごとにリーダー的な人
を中心に連絡をとりあつたり
しているが、教会としてサポー
トしていくためにも名簿が必
要。どこに行けばどのような
助けがあるか、行政のサービ
スなどについての情報をまとめ
ておく、教会内外の人材把握が
必要。情報が伝わらないと交
わりがでない、ミサでのお知
らせをはじめ共同体の情報提
供には多言語での対応が必要、
生活情報を求めて教会に來

るひまもな
い人、教会に
関わりを持
っていない

外国籍信徒のサポートをどう
するか。日本で生まれ育つこ
どもの信仰教育が課題。教会
の中で役割がもてるように、な
ど。

このほか、「サポートデスクの
ようなものが出来たら是非協
力したい」という有難いご意見
もいただきました。

「平和旬間におけるミサ」

来る8月6日～8月15日の
日本カトリック平和旬間にお
いて、仙台教区では8月13日の
主日に「平和を求めるミサ」を



すべての小教区で行うことに
なりました。

司教より委託を受け、ミサ
の式次第は人権を考える委員
会が作成し、教区本部より各小
教区に送付することになりま
した。(園部英俊)

難聴者のサポートについて

仙台教区病者障がい者団体連合会

6月7日(水) 仙台教区病者
障がい者団体連合会(会長 清
水文雄)の理事会が開催された。
会では「耳の不自由な方への
理解と協力」について過去2年
間取り組んできた。04年には、
難聴者の立場を中途失聴者の
講演を聞いて理解を深め、05年
は、私たちは難聴者のために何
が出来たらどうかと考え、具
体的にオーバーヘッド・プロジ
ェクター(OHP)を用いて要約
筆記に取り組みました。

今年、これを更に進めて、
要約筆記とパソコンを利用し
てスクリーンに映し出す方法
を習得し、実施できるように取
り組んでいきたいと考えてい
る。これについては、「カトリ
ック信者の技術者を養成する

ミニ養成講座」を開催すること
とした。

難聴者のための「手書き・パソ
コン書きとり ミニ講座」
以下、養成講座のご案内です。

日時 2006年9月30日
13時～16時

場所 カトリック元寺小路教
会信徒ホール

内容 書きとり及びパソコン
による要約筆記について

講師 要約筆記通訳「せんだ
い」 寺島礼子さん 他

『文字の都 せんだい(パソコ
ン要約)』 樋口智美さん 他

主催 仙台教区病者障がい者
団体連合会

難聴者が、講演会やミサの説
教などの理解を助けるために、
手書きやパソコンを利用して
内容の要約をスクリーンに映
し出す具体的な方法を習得し、
ボランティア活動に参加して
くださる方のための講座です。
ふるってご参加ください。

《問い合わせ先》

大島喜四郎 TEL 0222
245 2220
三田英子 TEL 022
227 7709

<シリーズ> 最終回
18名日本殉教者列福の推進
ディオゴ結城了雪 大阪の殉教者
ディオゴ 溝部 教

ディオゴの出身
は阿波徳島におい
て足利家に仕えて
いた結城家と思わ
れる。ディオゴは
12歳で大阪のセ
ミナリオに入學、
間もなく秀吉の禁
教令が發布され、
九州に送られ、有
馬(八良尾)にお
いて勉学をつづけ
た。後年イエズス
会に入会、神学をマカオにて終
了。帰国後司祭叙階寸前に徳川
の禁教令が發布され、1614
年マニラへと流され、マニラに
て司祭に叙階された。1616
年日本潜入、京浜地区の信者の
世話をフェルナンデス神父と
共に行つた。江戸、佐渡島まで
足を伸ばし、信者を励ました。
1621年以降京浜地区には
彼のみ残ることとなり、163
6年逮捕されるまで一人であ
つた。大阪で穴吊るしの刑にあ
い、殉教。1636年2月のこ
とであった。

*今回をもってこのシリーズを
終了します。執筆くださいました
溝部司教様に感謝申し上げます。

自然豊かな茂庭台に移転 仙台天使園落成式

社会福祉法人 ロザリオの聖母会 児童養護施設「仙台天使園」の新築落成式が6月10日(土)午前10時から、梅原克彦仙台市長、平賀徹夫司教をはじめ、市当局、カトリック関係者、社会福祉関係者など多数出席のもと新園舎で行われた。

理事長は、「聖ドミニコの精神にそって設立し、70余年の歴史には、言語に絶する困難もあったが、神の恵みと世界中の方々からの物心両面の支えがあつて今日に至り、この度の新築には、仙台市と自転車振興会、



そして、多くの方々の浄財によって子供たちのために茂庭台の素晴らしい環境に完成し、移転できたことに感謝します。」と挨拶した。

「みことばの祭儀」の中で、渡辺彰宏師は朗読された「山上の説教」こそ、ここに関わる人々の根本にすえる大切さを、平賀司教は祝辞として、「キリストの教えた愛」を述べ、出席者に感銘を与えた。梅原市長からも激励の言葉をいただき、建築工事関係者それぞれに感謝状を贈り、神の恵みのうちに閉会した。(理事長 Sr.大沼トモ子)



高松教区報から

東北の旅と
仙台教区新司教叙階式
感動的な巡礼ツアー
に参加して

後藤寿庵の心へ

二〇〇六年三月三日、大阪空港に高松教区の各地区から集まった信者は、空路で仙台にむかって旅立った。仙台空港に降り立った一行は、まだ各所に雪の残る早春の陽射しもまぶしい東北の景色に、これから体験する数々の思いに各自が、期待を抱いている。「今日で良かったですよ。昨日までは雨や雪で大変でした」とガイドさんは優しくこう話しながら迎えてくれた。溝部司教様の他は、仙台は初めてという人が殆どである。バスの中では資料を手に溝部司教様から東北地方の殉教者の話を聞く。迎賓館のような仙台教区の司教館は素晴らしい造りで、随所に設計者と共に関わった溝部司教様の思いが盛り込まれている。中でも中央にある小聖堂は、まわりに使われているステンドグラス



カテドラルを訪れた高松教区の巡礼団

もきれいで聖堂の中にいるだけで心の落ち着きを感じる。そんな司教館を、不意に離れることになった当の溝部司教様はもとより、仙台教区民にとつては、将に青天の霹靂であったであろう。司教館がある小高い丘には、カトリック系病院と、二つの修道院があり、その環境は祈りの場に相応しい。

バスは東北自動車道を北上し岩手県水沢市へ向かう。水沢教会では佐藤修神父様と、信徒の方と共にミサに与る。

一六〇年代に現在の水沢市福原の領主となった後藤寿庵は胆沢川に「寿庵堰」を設け、農業の近代化に尽くすと共に、すでに洗礼を受けていた寿庵は、カトリックの宣教にも大いに力を注いだ。今では五月最後の日曜日に、多くの信徒が集まって「寿庵祭」を開くという。

仙台教区司教叙階式、三月四日、又もや司教座空位となっていた仙台教区に、待たれていた新司教が誕生する。お

祝いと答礼に駆けつけた高松教区の信者三四名が、喜びと祈りのうちに参加させていたのだ。式場の白百合学園のホールには、一五〇〇人を超える信徒や、多くの司祭、日本の全司教団が、更にローマ教皇大使も出席して、新司教の叙階式・着座式が盛大、厳粛に行われた。この会場では、高松教区の信者のために、前列の三・四列目の席を確保してくれ親切な案内をしていただいた。祝辞に立った溝部司教様に、温かい信徒の拍手が鳴り止まない。あんなに優しい表情で話す溝部司教様の顔を初めて見た。平賀徹夫新司教様が、謝辞の中で高知の信徒から貰ったという手紙の件が披露された時、自分たちの小さな行為が癒しに役立ったこと、そして平賀徹夫新司教様の心に留まっていたことに胸が熱くなった。また紹介を受けて立った高松教区から駆けつけた私達に、会場から温かい拍手が送られた。この日を境に、溝部司教様の気持は、今後の高松教区の再生に全力で向かう決意を胸に収められたことであろうと、推察された。その高松教区にも三年後をしっかりと見据える覚悟が求められているのだ。

あけの星会総会

2006年度「あけの星会」(仙塩地区連合婦人会)総会が6月11日(日)元寺小路教会大聖堂において166名の参加のもとに行われた。

大会は、「主はわたしの牧者」(詩編23)の祈りで始まり、前会長阿部利枝さんが、指導司祭佐々木博神父様や会員への感謝のことばを述べた。

議事では、会則の一部変更が承認された。また、今まで継続してきた「たる貯金」の名称を「あけの星援助基金」とし、使途目的は広く援助活動を行うこととなった。

今年度の活動テーマを「私たちのいのちは神様のいのち、一人のいのちはみんなのいのち」とし、今年度の新たなスタートを切ることにした。

続いて、日力連(日本カトリック女性団体連盟)の理事より第32回名

古屋総会と活動計画並びに年問テーマ「21世紀への聖なる挑戦。共に生きる。」について報告と説明がなされた。また、日力連の賛助会員を増やしたい旨の話もあった。

新役員の紹介と新会長小貫トシ子の挨拶では、「いつも共におられる主を意識し、行事への参加と、心を一つにして協力し合うように、との呼びかけがなされた。



昼食後は、楽しみにしていた平賀徹夫司教様の「神は愛である」(教皇ベネディクト16世の最初の回勅)講演に耳を傾けた。

「神は独り子を与えてくださったほどに人間を愛され、ご自分の姿に似せて人間を創られた。人間に対する神の愛を知り、信じている者としての根本的

な姿勢が聖書には書かれている。」

また、アガベとエロスについて話され、「(神様から)降ってくる愛だけでなく、体と靈魂が一致するとき人間らしく生きられるのです。そして神の愛を受けたものは、周りに伝えていく義務がある」と、話を結ばれた。

当日の献金(56,927円)はスベルマン病院に贈るとの報告があり、副会長から「本会の発展と充実を願う」との閉会のことばが述べられ、会的一切を終了した。(小貫トシ子)

4・25いのちの日

日本カトリック女性団体連盟(通称・日力連)は1999年5月23〜25開催された第25回沖縄大会からのテーマ「命どう宝」(命こそ宝)から、「4・25いのちの日」を制定しました。神様から頂いたかけがえのない大切な命を思い起こし、毎年各地では、「いのちの日ミサ」を

ささげます。また、求める人々にこころを開き、祈りと支援について考える「いのちを守る運動」を立ち上げました。日本プ



ロライフ・ムーブメント(胎児保護、生命尊重センター)、カトリック社会問題研究所、暴力を止めた男性のための会と連携し、協力しています。

DV(家庭内暴力)被害の女性・子ども達の自立援助施設のために募金活動を行い、現在13施設の支援を続けています。

仙塩地区連合婦人会は「私たちのいのちは神様のいのち、一人のいのちはみんなのいのち」の活動テーマのもと、他団体と共に日力連運営に携わっています。

4月25日(火)、元寺小路教会小聖堂に会員その他、男性やシスターを含め60名が参加し、「いのちの日ミサ」をささげました。

司式した佐々木博神父は、「命、それは愛。出会いによって真の神の愛を体験できる。そして命が誕生していく。現代社会では、愛が欠如している。愛があれば命は守られ、増えていく。私たちは愛の証人となる使命を受けている」と話された。

その後、DVシエルトアの「すみれ荘」へ日力連から支援金30万円が贈呈されました。「写真」。「すみれ荘」のお世話をして下さっている善き牧者修道院の春山智子シスターから、お礼のことばと状況報告があり、自立事例として、5ヶ月滞在された56歳の女性の方が、4月から国際ボランティア団体「ジャイカ」の一員として、ペルーで裁縫技術指導・製品販売活動をされていること、また、シエルトアよりポータブルミシン2台を寄贈したお話を聞きました。

(阿部正子)

【夫・パートナーからの暴力の相談を受ける窓口紹介の問い合わせ先】

仙台市男女共同参画課

022 214 6143

FAX 022 211 59986

各地から

宮城 古川教会

川井啓神父 金祝を祝う

古川教会の協力司祭、川井啓神父様は、6月10日(土)で司祭叙階50周年を迎えられました。



金祝のお祝いということで、仙台、東京からも記念日のミサに駆けつけてくださり、喜びを分かち合いました。

川井神父様は、アジアの神学生のためにと学費を援助してくださったカナダの恩人のこと。叙階式直前の黙想会に高熱を出し参加できず、司祭に召されていなかったのでは、と考えたこ

と、小林司教様のご配慮で、司祭に叙階されたこと、司祭誕生に力をくださった恩人の思い出などを、力強く話してくださいました。
翌6月11日(日)はミサの後、家庭的雰囲気、ささやかに祝いました。(渡辺征子)

今年金祝を迎える司祭
7月1日 レヴェイエ・アンドレ神父(三沢教会)
12月20日 土井文雄神父(大湊教会)
12月22日 鷹鷲達衛神父(司祭の家)

宮城 石巻教会 六年ぶりの堅信式

5月28日(日)、「主の昇天の主日」に、マルチノ平賀徹夫司教様の司式によって、6年ぶりの堅信式が盛大に挙行されました。今回の受堅者は、女子中学生2名(うち1名は隣の塩釜教会から参加)、男子高校生1名、成人女子4名の計7名でした。

堅信を受けた本人たちは、勿論のこと堅信式のミサにあずかった信者一同も、神の深い恵



みを実感でき、共に大きな喜びを分かち合いました。平賀司教

様から、説教の中で、「神の愛に生きる者となりなさい」と、大変力強いお言葉をいただきました。このミサに参加できた全会衆も、とても深い感動に満たされました。
堅信を受けるための3回にわたる準備の集いには、代父母も一緒に参加し、堅信式に臨んだので、一人の代母は「実は、自分の堅信のときは、準備の講話を聞いたことがなかったのに、今回改めて神の愛に触れることができて感慨深かった」と話しておりました。
式後、平賀司教様と受堅者、佐々木博主任司祭を囲んでのにぎやかな祝賀パーティの後、わたしたちは互いに神の愛を告げ知らせる証人となれるように、それぞれ心に誓って散会しました。(倉本純一)

【訂正】169号4頁 仙台教区宣教司牧評議会代議員・修女連・sr.小針千代は、sr.春山智子の間違いでした。

G. シュトルム神父遺作展

場所：二戸市民文化会館 展示室

二戸市石切所字狼穴1-1

TEL 0195-23-7111

日程：2006年7月26日(水)～30日(日)

展示予定数：100点(絵画43点・植物画57点)

主催：二戸市

後援：ベトレム外国宣教会本部・岩手日報・デーリー東北新聞社 Waの会・美術集団「北方」

入場無料

おしらせ

第22回 カトリック医療関連学生セミナー メインテーマ『弱い立場の人たちと共に』

対象：医学・歯学・看護 ほか医療関係の学生、および医師、その他医療従事者など

プログラム内容に関心のある方々。

カトリック信徒以外の方もどうぞ。

期日：2006年8月25日(金)正午～27日(日)

会場：かんぼヘルスプラザ東京

東京都豊島区東池袋4-7-7

TEL 03-5952-5751

参加費 学生 5,000円 一般 10,000円

宿泊費 学生 5,000円 一般 10,000円

申し込み・問い合わせ：日本カトリック医師会 事務局
(申し込みは7月31日まで)

TEL/FAX 03-3467-2889

E-mail info@j-cma.com http://www.j-cma.com

主催：日本カトリック医師会(担当・東京支部)

活動紹介

カトリック医師会仙台支部
 仙台支部は青森県、岩手県、宮城県のカトリック関係医師・歯科医師ならびにその他の医療関係者、医学生など、56名の会員で構成されている。

2005年4月、支部は新役員体制を整え、同年9月カトリック北仙台教会信徒館において第1回仙台支部会を開催した。支部会では、2006年度支部総会などの企画骨子を立案し、講演会講師には、山浦玄嗣先生をお願いすることになった。

私の気分転換

スペルマン病院ホスピス棟
 看護師 赤井聖子

田舎育ちの私は、自然の中に身を置くのが好きだった。が、そのことに気づいたのは、東京で暮らし始めた二十歳の頃である。

「光化学スモッグ」のため、空を見上げてもどんよりとし、チカチカと目が痛くなるばかりであった。高村智恵子ではないけれど、東京には空がないと嘆き、そして、思い出した。

子供の頃、家の前の緩やか

その後、新事務局を設立(早坂歯科)し、世話人会(仮称)を発足させ、会員名簿、支部会則案などの作成や、2006年度総会の企画作業を行った。

2006年4月23日(日)の総会では、山浦玄嗣博士による公開講演会、「ふるさとの言葉で神様の息吹を ケセン語訳聖書が目指す新しい世紀」(教区



報 169号
 掲載) =
 写真) に
 は約 340
 名の聴衆
 が参加し、

盛会に終わった。
 仙台支部は今後、新会則のもとに日本カトリック医師会の目的を基本とし、協力しつつ活動することを考えている。
 (支部長 藤村重文)

修道院紹介

聖ドミニコ女子修道会

天使園修道院

ハレルヤ 日の昇るところから沈むところまで、神の名は讃えられる。(詩編113・3)

昨年11月、児童養護施設仙台天使園の新天地、太白区茂庭台への移転を前にして、私たちは新しい修道院建築を考えました。が、経済的に無理なので、近くの33階建ての高層マンションが摂理的に空いていたため、その一角を修道院としました。

この修道院での朝夕の眺めは、ハレルヤの詩編が自然に湧き上がります。今では、私は少しずつ地域の方々と顔見知りになってきました。

天使園修道院の使命は、なんと云っても天使園の子どもたちに神様の祝福をお祈りする



ことです。また、茂庭台町内会活動や、マンションの人たちとの集まりにも徐々に参加して、地域との交流を図っています。地域の人々にとって、シスターの存在は初めてなので、宗教・その他においても多くの関心を示してください。

私たちは、緑の豊かなこの茂庭台にイエスの福音がこだまするように、今後も努めてまいりたいと思います。

(Sr.竹本のぶ)

*外国ではマンションに入っている修道院が増えているが、日本では珍しい事である。



天使園修道院のあるマンション

天使園

新刊案内

『現代社会への挑戦 今を生きる女子修道会』

取材執筆 木崎さと子 / 編集 女子パウロ会 / 発行所 女子パウロ会 / 定価 1800円+税
 雑誌「あけぼの」創刊50周年を記念して、1冊の本にまとめることを意図して、日本全国の女子修道会を取材した。

これは単なる修道会案内という本ではない。観想修道会から活動修道会まで、どの修道会も奉仕するそれぞれの分野で現代社会から挑戦を投げかけられ、同時に、社会に挑戦を投げかけている。執筆者のカトリック信者であり、芥川賞作家である木崎さと子さんのシスターたちを見つめる視線が大変温かく感じられる。

本書の中に、「歴史をつらぬいて息吹く修道生活」と題して修道生活の歴史を溝部脩司様が執筆しておられる。さらに、漫画家のサトウサンペイさん、森一弘司教さん、アナウンサーの山根基世さんたちの「シスターと私」と題して随筆を寄せておられ、それがまた楽しい読み物となっている。日本の女子修道会全部が取り上げられているので、修道生活を知らいたいという人のためだけでなく、だれにも役立つことだろう。



今を生きる 女子修道会